同性婚は根本的権利

なぜ、同性愛者の権利や同性婚が法律で守られるべきなのか―。11月、都内で開かれた「世界のLGBT事情」をテーマにした講演会。会場から投げ掛けられた質問に、フランス人ジャーナリストのフレデリック・マルテル氏は答えた。「同性婚は根本的な権利である」と。

（構成・佐藤　百合）

世界のLGBT事情【下】

仏ジャーナリスト フレデリック・マルテル氏に聞く

「新しい家族の形 受け入れて」

一問一答

日本の性的少数者（LGBT）を巡る状況や今後の展開をどう見るか、マルテル氏に見解を聞いた。

（聞き手・佐藤　百合）

―今回で3度目の来日。印象は。

「外務省、経済産業省、内閣府などの会合に参加した。みんな『日本はもっとソフトパワーが必要だ』と言っていた。どうしたらクールジャパンをもう一度実現できるか。もっと多くの旅行者や、アーティスト、優秀な学生を呼び込めるか、と」

「LGBT問題が全ての解決策とは言えない。しかし、彼らにとって居心地の良い場所にすれば、日本はもっとクールでパワフルな国になれる。LGBTも普通の人々と同じだ。日本が性的少数者を歓迎しない国であれば、同性愛者のアーティストやスポーツ選手は、他の国に行くだろう。もし、日本がアジアで初めて同性婚を認めた国になれば、多様性や寛容さを世界に示せる。日本のイメージを変える効果的な方法の一つだ」

―そのためには、どうしたらいいか。

「簡単なことだ。非難せずに、受け入れること。父、母、子だけでなく、新しい家族の形が生まれている」

「米国では、30州以上が同性婚に反対していた。フランスでも、同性婚が法制化される前は、大規模な抗議デモが起こった。しかし現在、同性婚は米国でも認められ、トランプ次期大統領でさえ、逆戻りはしないと明言している。フランス人の8割は、同性婚を支持している。初めは難しいかもしれないが、その後は多くの人に受け入れられるはずだ」

―日本のLGBT事情をどう思うか。

「日本に住んでいるわけではなく、十分な判断材料もないので、何とも言えないが、日本は民主主義国家であり、性的少数者も受け入れられつつある。その点では、すでに中国より進歩的。しかし、それだけでは十分ではない。必要なのは、もっと積極的な対応。例えば、同性婚の法制化だ」

「異性婚なら子どもが持て、パートナーの医療にも関われるし、相続もできる。でも、同性同士ならできない。相手が死んだら赤の他人。それは差別だ。同性婚は誰かの権利を奪うものではなく、もっと多くの人を守るものだ」

―反対派からは、「少子化の時代におかしい」という指摘があるが。

「言っていることは理解できるが、その議論は間違っている。養子縁組や人工授精で子どもは持てる。同性婚を法制化すれば、逆に子どもは増える。海外には、子どもがたくさんいる同性カップルも多い」

―「自然の摂理に反する」との声も上がる。

「そういう信条があるのは分かる。でも、理解しないといけない。もし、あなたが『家族』というものを大切にしているならば、同じく家族に重きを置いている同性婚に反対できないだろう」

―同性婚が法制化するには、どんな運動やプロセスが必要か。

「賢い首相、有識者、テレビスター、インターネットコミュニティー、女性活動家など、同性愛コミュニティーだけでなく、みんなで協力しないといけない。なぜなら、『make Japan great again（偉大な日本を再び）』だから」

「やがてアジアでは、台湾、香港、シンガポールなどで同性婚が合法化されるだろう。2番になりたいか、1番になりたいか。これは時代の潮流なんだ」

ずっと昔から一緒に住んでいるカップルの一方がエイズにかかって、入院した。そうすると、相手は病院に見舞いに行けない。診断や、医療上の選択に関わることもできない。万一、亡くなった場合は相続もできない。

同性婚は、単に親子関係の問題ではなく、ごく普通の日常生活を送っていくのに必要なものだ。

今まで私が調査した限りでは、同性カップルに育てられたからといって、子どもがきちんと発達できなかったケースや、普通に生活できなかったという結果は出ていない。むしろ、異性愛者の夫婦の虐待は数多くある。

家族というものを伝統的に捉えている人だって、ゲイ、レズビアンのカップルが、彼らなりに家族という価値を守っていると認めざるを得ないはずだ。

まさに問題の本質を突きましたね。結婚とは何か。いくつかの考え方があると思います。

例えば、宗教的な概念として考える場合、あるいは生殖を管理するものと考える場合。

そして、3番目として、これは私の考え方でもあるが、同性愛のカップルも家庭を養護しているという考え方。つまり、同性愛カップルもお互いの合意の上で、一緒に生活していることに変わりないということ。

そういうカップルは、異性愛者と同じ権利や保護を受けられなくてもよい、という理由は見当たらない。

ドイツの哲学者、ハンナ・アーレントは、「結婚は基本的な権利である」と言った。つまり、誰と一緒に人生を送るかということは、人間の権利として根本的なものということだ。

この問題について、エイズが大きな役割を演じたと思っている。

マルテル氏

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件を受け、

性的少数者への理解を広げようと開かれたパレード
＝5月、東京都渋谷区

■「論説・特報」へのご意見、ご感想をお寄せください■

ファクス＝045(227)0153＝か電子メール＝houdo@kanagawa-np.co.jp＝で神奈川新聞報道部まで。

キャ
今ある
症状を
不調の
弱ってき
修復し
キャベジン
加齢などで
胃粘膜を丈
胃を元気に